令和6年度
加賀市立片山津中学校
学校評価計画書・報告書

評価の項目	①-1 教育課程・学習指導
今年度の重点目標	学習サイクルを確立し学習意欲を高める。
具体的取組	各学年と教科担当でその学年にあった家庭学習の取り組み方法を示し、継続して取り組ませる。プラ
担当	教務主任・各教科代表
現状及び取組状況	学習習慣が身につけている生徒と身につけていない生徒の二極化傾向にある。全体でも家庭学習の時間が少ない。
評価の観点	(成果指標) 家庭での学習が習慣化した生徒が増えた。
実現状況の達成度判断基準	生徒・生活アンケート(11)「自分で計画を立てて勉強している」 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	Dの場合は、取組を再検討する。
中間集計結果(%)	C(66.6%) 1年:66.1%/2年:62.5%/3年:69.8%
分析(成果と課題)	3分の2程度の生徒が計画を立てて学習しているとは言えないという回答である。 ※令和5年度との比較数値(同集団、同時期、経年変化)…1年(現2年):88.7%/2年(現3年):83.9%
今後の改善策	学校研究の片輪である「自己決定の累積」をPTに基づく学習と位置づけ、もう片輪のPBS理論によってサポートするなど、向上の模索を行う必要がある。
最終集計結果(%)	C(68.1%) 1年:69.5%/2年:60.0%/3年:75.0% 昨年度同時期結果 C(61.3) 1年:58.1%/2年:57.6%/3年:68.4%
中間結果との差(%)	+1.5% 1年:+3.4%/2年:-2.5%/3年:+5.2
分析(成果と課題)	昨年度同時期比較ならびに今年度内比較のいずれも、若干の改善が見られる。特に3年生においては進路選択を契機とし、自律学習計画の重要性に意識が向いたことを推測する。
次年度への改善策	今年度のPTでは「国・社・数・理・英」の各教科において年間計画を作成し、毎PTにおいて生徒が1週間の予定を立てることを手助けした。また、教科によっては小テストの計画も明示し、生徒が主体的に取り組み、次第に成果を実感できるようになったことが数値の向上に影響したと考える。今後は、小テスト実施計画の全教科明示を必須としたり、家庭学習で用いられる学習教材を積極的に計画に盛り込むなどの工夫を行いたい。また、計画を実行できたこと(生活設計ノート等による生徒の自己申告)を教師が確認でき、賞賛を与えることにより生徒自身が「よい習慣」を自ら認める仕掛けの構築が必要である。

評価の項目	①-2 教育課程・学習指導
今年度の重点目標	個人を十分に把握し、個別最適な学習の方法を確立し学習意欲を高める。
具体的取組	生徒の実態を把握し、学び合いに加え、ICTを効果的に活用し、生徒が「わかった・できた・もっと知りたい」と感じる授業実践を行う。また、授業のユニバーサルデザイン（UDL）化、個人の定着度・理解度を鑑みた単元内での自由進度学習にチャレンジする。
担当	研究主任・教務主任
現状及び取組状況	生徒の実態に応じた実践をしているが、さらに生徒の「わかった・できた・もっと知りたい」を引き出す工夫が必要である。
評価の観点	（成果指標）授業が分かりやすく、学習意欲が向上した。
実現状況の達成度判断基準	生徒・授業アンケート（3）「先生の説明や質問、指示はわかりやすかった」（全教科平均） A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準（備考）	Dの場合は、指導方法を再検討する。
中間集計結果（％）	1年生93%A 2年生96%A 3年生95%A
分析（成果と課題）	3学年とも90%の生徒が説明指示が分かりやすいと答えている。残り約1割の生徒がどのようにしたら理解することができるようになるか環境を整えていく必要がある。まずは誰もがわかる、わかりやすい指示を授業で心掛ける。そして、その中でわからない生徒を見取る必要がある。
今後の改善策	誰もが分かる質問、指示を行う。どの生徒が困り感を持っているか見取って適切な支援を考える。機能分析も必要か。
最終集計結果（％）	1年生93%A 2年生96%A 3年生98%A
中間結果との差（％）	1年生+2% 2年生±0%A 3年生+4%
分析（成果と課題）	全体として数字の向上がみられる。生徒の様子を見取る大切さに気づき、2学期そのことを意識してきたからだと考える。何をすればよいかわからない生徒が出ないよう環境設定を苦手な子を意識してする必要はある。
次年度への改善策	質問内容と取り組みの内容がリンクしていない部分もあり、来年度取り組み内容を精査する必要がある。またわからない生徒を追跡調査しその生徒がわかるように手立てを改善していく。

評価の項目	② 生徒指導 ※いじめの未然防止
今年度の重点目標	情報の共有から行動実践へとつながる生徒指導体制を確立する。
具体的取組	「生徒指導委員会・各学年会」や生活ノートの記述、各アンケートや面談からの生徒の行動・言動より見取れる小さな気付きなどから情報を収集・共有し、組織的な対応を心掛ける。また事例検討会や校内研修等を通して指導体制を常に見直していく。
担当	生徒指導主事（生徒指導委員会）
現状及び取組状況	情報の共有から指導体制へとスピード感をもって対処・対応ができるように取り組んでいる。
評価の観点	（成果指標）情報の共有がなされていたか。情報の共有から方針・指導体制につながったか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート（21）「問題行動時の組織的対応の体制が整っている」 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満
判定基準（備考）	Dの場合は、方法・内容を再検討する。
中間集計結果（%）	a 70% b30% （計100）
分析（成果と課題）	成果 初期対応においては情報の共有、スピード感を持って対応することを心がけ、実行している。小さな問題であっても、個人で判断せずに情報共有、連携した対応を丁寧かつ確実に行っていきたい。
今後の改善策	問題行動の件数が右肩上がりであるため、情報共有、スピード感を持った丁寧な対応をすることはもちろんのこと、誰かが問題を抱え込むことのないように互いに労わりながら、励まし合いながら、ポジティブな視点を忘れずに2学期も対応していきたい。
最終集計結果（%）	a 57% b43% （計100%）
中間結果との差（%）	a - 13% b +13%
分析（成果と課題）	aの数値が13%下がっている。問題行動の件数だけを見れば2学期10月以降は減ってきているのが現状である。小さなことでも情報を共有し、誰かが問題を抱えることのないように心がけたい。情報の共有と初期対応に常に課題意識を持ち、対応にあたる。
次年度への改善策	常に情報を共有していきましょう。そのために近くに人の話をすることが大事だと思います（何気ないところに問題があることもあります）。抱え込まず、みんなで考え、チームで対応する意識を先生方みなで意識していきましょう。

評価の項目	③ キャリア教育・進路指導
今年度の重点目標	系統的な指導と、自分の将来を考えた進路選択をする能力・態度を育成する。
具体的取組	特別活動を扇の要として、総合的な学習の時間は勿論、全教育活動を通してキャリア教育を行うための全体計画を作成し、3年間を見通した指導を推進していく。
担当	進路指導主事・各学年進路担当
現状及び取組状況	1年生では、人間関係作り、就労の意義、2年生では、進路と職業の選択、3年生では既習事項をさらに深めるために、夢授業やライフプランニングを通して、自分にふさわしい進路、職業、人生設計について考える。
評価の観点	(成果指標) 様々な活動を通して自分の将来について意欲的に考える生徒が増えた。
実現状況の達成度判断基準	生徒・生活アンケート(3)「将来の夢や目標を持っている」 A 85%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	Dの場合は、指導体系・方法を再検討する。
中間集計結果(%)	B(75.2%)
分析(成果と課題)	成果 3年生は肯定的な意見が79.3%と多い。進路を意識している結果と言える。 課題 経年比較をすると3年生(86.0%→79.3%)、2年生(85.4%→71.4%)と昨年度よりも肯定的意見が低い。
今後の改善策	2年生では3学期に高校調べ、3年生ではライフプランニングを通して将来への意識づけを行う必要がある。
最終集計結果(%)	B(75.3%)
中間結果との差(%)	+0.1%
分析(成果と課題)	成果として1年生は79.3%→83.4%、2年生は80.3%→88.3%、3年生は79.3%→82.4%と1学期に比べ進路への意識が高まった。 課題は3年生が受験シーズ人にも関わらず1.2年生よりも意識が低いことである。
次年度への改善策	3年生のライフプランニングの授業時数が限られていたため、もう少し時間確保が必要である。また、進路の個人面談の時間を増やし、将来の夢や目標をじっくり聞く時間を設ける必要がある。

評価の項目	④ 保健管理
今年度の重点目標	基本的な生活習慣を定着させる。特に歯や口の健康づくりや睡眠時間の改善を図る。
具体的取組	生徒保健委員会の活動で、正しい生活習慣に関する知識を広め、母親委員会との協力で家庭との連携を考えていく。また、学校保健委員会等で家庭・地域と情報を共有し、基本的な生活習慣の定着につなげる。
担当	保健主事
現状及び取組状況	むし歯の治療率は年々高まってきているが、春の検診で再びむし歯になっている生徒が多い。またTV・ゲーム・ネットなどで睡眠時間が少なく体の不調を訴える生徒がいる。
評価の観点	(成果指標) むし歯の治療率が向上したか。
実現状況の達成度判断基準	歯科検診でむし歯があった生徒の治療率(むし歯治療済みカードの回収率) A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、取り組み方を検討する。
中間集計結果(%)	C(70%)
分析(成果と課題)	昨年度と比べると、むし歯保有率が高くなり、治療をしなければならない生徒が増えている。治療の手だてとして、健診終了後と夏休み前に治療を勧めるお知らせを出したり、生徒保健委員会のむし歯地図作成で生徒への治療への意識づけを行った。
今後の改善策	治療がまだの生徒への個別指導とクラスのむし歯地図の活用する。
最終集計結果(%)	C(76%)
中間結果との差(%)	6%
分析(成果と課題)	夏休み中は多くの生徒が歯科受診し治療を行ったが、夏休み後は治療を開始する生徒が数人に留まっている。このような状況から夏休みまでに受診に繋げる取組みを、各学年の教員や部活動顧問の協力も得ながら考えていく必要がある。
次年度への改善策	意識が低い家庭への働きかけをどうしていくか。また、不登校で健診自体できていない生徒への働きかけをどうするかが課題である。

評価の項目	⑤ 安全指導
今年度の重点目標	校内の避難経路を確保する日頃の安全管理と危機感をもった避難訓練に務める。
具体的取組	校内の危険箇所を把握した避難訓練，更にいろいろな場面を想定した避難訓練の実施。さらに防災教育に取り組むことで，自身の命は勿論，大切な人の命を守るための行動をとれるようにする。
担当	教頭・防災安全担当
現状及び取組状況	校内の危険箇所を把握していながらも，その解決にまでいたっていない。能登半島地震においても大きな被害はなかったが，校舎の亀裂などが少し大きくなっている。
評価の観点	(成果指標) 安全点検によって危険箇所の把握と改善がなされてきたか。また適切な防災教育を行い、実際の災害を想定した避難訓練が行われたか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(27)「職員が安全点検を適切に行い、実際の災害を意識した避難訓練が行われた」 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。
中間集計結果(%)	A(90%)
分析(成果と課題)	6月実施の安全点検から危険箇所を把握し、修繕を進めている。また、7月9日にシェイクアウトいしかわを実施した。生徒は真剣に取り組んでいた。9月2日には、地震から火災が発生したと想定し、避難訓練を行い、実際の災害を意識した避難訓練を行う予定である。
今後の改善策	日頃の安全管理を確実にし、地震によって器物が倒壊しないようにする。また避難訓練には、危機感をもち取り組めるようにする。
最終集計結果(%)	A(100%)
中間結果との差(%)	+10%
分析(成果と課題)	安全点検を実施し、破損箇所については修繕を進めてきた。また転倒する恐れのある棚は天井との間に突っ張り棒を入れて固定した。避難訓練については、能登半島地震のこともありどの生徒も真剣に臨んでいた。
次年度への改善策	防災の視点を意識しながら安全点検を確実に実施していく。また地震・火災等、様々な場面を想定した避難訓練を実施していく。

評価の項目	⑥ 特別支援教育
今年度の重点目標	校内委員会を月に一回程度開催し、情報交換や生徒理解に努め、3層支援を通して生徒一人一人の状況を把握し、個を対象とした効果的な支援方法について検討する。
具体的取組	SWPBSについて校内委員会や研修会を通して、全教職員で共通理解・共通行動を図る。学年会や生徒指導委員会、教育支援員、SC、専門相談員等と連携してより具体的に個々の支援の方法、内容、変容効果について検証し、実践していく。
担当	特別支援コーディネーター（生徒支援委員会）
現状及び取組状況	事例検討会や校内研修会を開催し、支援の方法を検討している。
評価の観点	（成果指標）生徒は学校が楽しいと感じているか。
実現状況の達成度判断基準	生徒・生活アンケート（生徒16・2）「学校に行くのは楽しいと思う」と「先生はあなたのよいところを認めてくれていると思う」のいずれも A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満
判定基準（備考）	一方でDの場合は、原因を分析し、取組を検討する。
中間集計結果（%）	「学校へ行くのは楽しい」（88.5%） 「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う」（97.6%）
分析（成果と課題）	「学校へ行くのが楽しい」の項目については2年生が85.7%と若干低いものの、1年生(89.3%)と3年生(90.5%)がそれぞれ高い評価だった。1年生は全体的に幼さが強く観られ、友人と遊ぶ事ができる場所だと感じている生徒が多いためだと思われる。3年生は落ち着いた雰囲気のまま進級し、学校生活に満足している割合が多いと思われる 「先生は自分の良いところを認めてくれていると思う」の項目については3年生では「そう思う」と「どちらかというと思う」の合計が100%になるなど3年前から取り組んできたSWPBSの効果が大きくみられている。
今後の改善策	生徒間のトラブルがみられた2年生に対して更なるPBSの取りくみを行う必要が感じられる。
最終集計結果（%）	「学校へ行くのは楽しい」（84.1%） 「先生はあなたの良いところを認めてくれていると思う」（90%）
中間結果との差（%）	B(87%)
分析（成果と課題）	「学校へ行くのが楽しい」の項目については3年生が91.7%と若干ポイントが上昇した。一方、1年生(80.5%)と2年生(80%)については中間結果と比較しポイントは下がっている。特に、1年生は約9%近くダウンしたことは、中学校生活に慣れてきた中でのトラブルも原因の1つにあると思われる。2年生はPBSの取り組みが良い方向につながっている。3年生は学校生活に満足している割合が多いと思われる。 「先生は自分の良いところを認めてくれていると思う」の項目については、2,3年生でA評価ではあるが、1年生で85%を下回った。
次年度への改善策	今後、1年生については、授業だけでなく生活全般において教員が「仕掛けて褒める」取り組みを増やしていくことで自己肯定感をあげていくことが望ましい。また、生徒同士のつながりが増える時期には、人間関係づくりのSSTなども意図的に仕組むことも必要である。

評価の項目	⑦ 組織運営・業務改善
今年度の重点目標	学年担任制を具体的にきめ細かく運用し、業務の平準化・職場環境の整備を通して教育の質と向上を図る。
具体的取組	朝礼・終礼、給食指導、総合的な学習の時間や道徳の評価など、共通理解を図った上で分担して行う。もって個々の生産性と、タイムパフォーマンスなどの効率性の向上に取り組む。
担当	業務改善チーム
現状及び取組状況	属人化された業務状況に頼り、超過勤務時間が80時間を超える職員が数名いる。
評価の観点	(成果指標) 学年担任制の運用を通して、業務改善が行えているか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(13)「学年担任制を業務改善に機能させた」の割合 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の校務分掌や業務内容を検討する。
中間集計結果(%)	B(70%)
分析(成果と課題)	先生方は、生徒一人一人を大切に、きめ細やかな支援を行っているので、学年担任制が業務の改善につながっているとは言い難い。
今後の改善策	学年の状況に応じて、柔軟に担任ローテーションを行っていく。
最終集計結果(%)	A(80%)
中間結果との差(%)	+10%
分析(成果と課題)	各学年の教師数によって学年担任制ができる学年と難しい学年があったが、どの学年も情報の共有や共通理解を図り、組織的に学年運営をすることができていた。業務がその教師だけに集中することのないようにしていくことや生徒指導上の困難さを全教師で分かち合い、対応していくことを継続していく。
次年度への改善策	学年担任制を業務改善としてとらえるのではなく、組織的な学年運営として捉えていく必要がある。

評価の項目	⑧-1 研修 組織的アプローチ (3層支援体制の確立)
今年度の重点目標	生徒がわかった、できた、もっとやりたいと感じられるように学校規模での第1層支援を通じて、第2・第3層支援が必要な生徒を洗い出し、配慮を必要とする生徒に対しての支援の方法を協議し、具体的支援を行うことで、学習意欲と学力の向上を目指す。
具体的取組	生徒がわかったと感じる機会を増やし、学習意欲と学力の向上を図るために、各教科・領域・学年で工夫している内容を提案授業、研究授業、個別の指導計画等でわかる授業の実現を目指す。
担当	研究主任
現状及び取組状況	教科の枠を越えた授業研究を実施している。生徒の学びが図られる環境をつくる、授業規律の確立を行っている。
評価の観点	(成果指標) わかった、できた、もっとやりたいという生徒の学習に対する意識を高められたか。
実現状況の達成度判断基準	生徒・生活アンケート(15)「授業の内容がわかりやすい」 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の研修内容を検討する。
中間集計結果(%)	1年生 85.7% B 2年生 78.6% C 3年生 88.7% B
分析(成果と課題)	校内研修や、模擬授業を通して、学習で目指す生徒の姿を職員で共有できた。アンケートの結果から「先生の説明や質問、指示はわかりやすかった」の授業アンケートの項目はどの学年も9割を超えているが、「授業の内容がわかりやすい」という生徒は8割程度になっている。生徒が何を基準に「わかりやすい」と価値づけているのかを分析する必要がある。
今後の改善策	指示・説明は9割の生徒がわかりやすいと答えているので、生徒へのフィードバックを意識することで生徒の「授業が分かった」につながるのではないだろうか。点数のフィードバック。(良い点数が返ってきた時の喜び) 称賛でのフィードバック(よく理解しているね。素敵な回答だね。よくできたね。) これらPBSポジティブな方法で適切なC(フィードバック)を行ってみては?
最終集計結果(%)	1年生 82.6% B 2年生 88.4% B 3年生 91.7% A
中間結果との差(%)	1年生 -3.1% 2年生 +9.8% 3年生 +2.7%
分析(成果と課題)	1年生が数字として下がっている。原因として授業に生徒が落ちついて向かうことができない生徒が増えてきたと考える。
次年度への改善策	環境設定を行い、生徒の実情に応じた学習形態をとっていく必要がある。2年生が向上したのはICTの継続的活用と協働の時間を意図的に増やしていったので、ICTを使える簡易研修をこまめに行っていく必要がある。

評価の項目	⑧ー2 研修 SWPBS + Swaton Company
今年度の重点目標	学校規模でのポジティブな行動支援によって、生徒一人一人の好ましい行動を引き出し、自己肯定感や主体性を醸成する。そのための学年担任制であることを教員が理解し行動する。また、その効果的な場面設定の一つとして、Swaton Company (生徒による会社の起業・経営)を設立する(2年目)。
具体的取組	学年担任制の意図を共通理解し、SWPBSに努める。併せて保護者への協力も求めていく。Swaton Companyの設立2年目である今年は生徒事務局を中心に取り組んでいく。
担当	研究主任 生徒指導主事 教務主任
現状及び取組状況	SWPBSの共通理解・共通行動について脆弱な部分がある。
評価の観点	(成果指標) SWPBSが生徒の主体性を高めた。
実現状況の達成度判断基準	生徒・生活アンケート(18)「自分の考えを表現したい(行動に移したい)と思うようになった」 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、原因を分析し、次年度の研修内容を検討する。
中間集計結果(%)	1年生 85.7% 2年生76.8% 3年生88.7%
分析(成果と課題)	自らの考えを表現したい(行動に移したい)と思うようになった生徒の割合を見ると2年生の値がやや低かったように思う。SWPBSは子どもたちの良い所をのばすことに力をいれること。1.3年生は85%を超えていることを考えると一定の成果があったように感じる。
今後の改善策	SWPBS+SWCOは自己肯定感やチャレンジ精神を高め、自己を表現する(SWCO)がさらに生徒主体の活動につながるように我々が伴走者としての視点をもち有意義な活動になるようにしていきたい。
最終集計結果(%)	1年生 89.1% 2年生81.7% 3年生83.3%
中間結果との差(%)	1年生+3.4 2年生+4.9 3年生+-5.4
分析(成果と課題)	swco: 去年ほど勢いがなかった。 SWPBS:先生方が「目の前にある悪いことばかりではなく、目の前にある良いことに目をむけてくれたこと」が成果。課題は「PBSチーム」を推進させることができなかった。
次年度への改善策	swco: 3年のキャバオーバー SWPBS: PBS推進チームを機能し、推進チームとしてSWPBSを動かしていきたい。

評価の項目	㊟-1 保護者、地域との連携
今年度の重点目標	情報公開を充実させ、保護者や地域の方との連携を深める。
具体的取組	様々な方法や場面を活用し、学校の情報が滞らないように保護者は勿論、地域へも発信していく。
担当	教頭・情報担当
現状及び取組状況	H P、メール配信での学校の取組や情報は、7割程度しか保護者に伝わっていない。
評価の観点	(成果指標) 学校の取組や生徒の様子が保護者に伝わったか。
実現状況の達成度判断基準	保護者アンケート(3)「配信メール、H P等によって学校の様子が伝わった」 A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。
中間集計結果(%)	B(88.1%)
分析(成果と課題)	コドモンを活用し、学校便りや生徒指導便りをデータ配布している。また学年便りはHPにアップしている。このことにより学校の様子が伝わっていると評価している保護者が多いと捉えている。
今後の改善策	学年便りについても、コドモンでデータ配布することでより学校の様子が保護者につたわるのではないかと考える。
最終集計結果(%)	B(88.5%)
中間結果との差(%)	+0.4%
分析(成果と課題)	コドモン配信については、平均して8割ほどの保護者が読まれている。必ず読んでいただきたいものについては、メールも送信している。コドモンの配信数を多くすると既読にならないので、配信内容を精選していく必要がある。またHPにもあるのだが、学年だよりをコドモン配信をした方がよいのかどうかを検討していく必要がある。
次年度への改善策	配信内容を精選しながらコドモンの配信を行っていく。

評価の項目	⑨-2 保護者、地域との連携
今年度の重点目標	学校運営協議会が適時・適切に生徒の活動にかかわる。
具体的取組	学校運営協議会委員が生徒の活動にかかわる機会を増やす。
担当	教頭・教務主任
現状及び取組状況	学校運営協議会が「お客様」的扱いになっており、学校教育活動特に生徒の活動への実質的関わりが薄い。
評価の観点	(成果指標) 学校運営協議会に生徒の活動が周知され、適時・適切に生徒と教職員からの要望が学校運営協議会に伝えられたか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(28)「学校運営協議会と生徒(集団)の関わりがある」 A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満
判定基準(備考)	C・Dの場合は、方法・内容について再検討する。
中間集計結果(%)	A(80%)
分析(成果と課題)	学校運営協議会委員の皆様は本校の教育活動にご理解いただき、支援して下さるお気持ちを強くもってくださっている。1学期は、生徒の活動と委員の皆様とをつなげることができなかった。
今後の改善策	キャリア教育(職業人講話)、総合的な学習の時間やスワトンカンパニー、授業の見守り等へのご協力と援助をお願いしていきたい。
最終集計結果(%)	B(72%)
中間結果との差(%)	-8%
分析(成果と課題)	スワトンカンパニーにおける柿の葉寿司の販売や校内カフェで生徒と関わっていただいた。また、除雪をしていただき、生徒・教職員・保護者が安全に登下校ができるようにしていただいた。
次年度への改善策	学校の様子を学校運営協議会の皆様にお伝えし、生徒の活動を支援していただけるようにしていく。

評価の項目	⑨-3 教育環境整備
今年度の重点目標	授業でのICT活用の推進
具体的取組	GIGA研修を行うことや、ICT機器の操作方法を理解し、授業で適切に活用できるように取り組む。
担当	GIGA担当者・教頭
現状及び取組状況	一人一台のPCが配備され、授業および朝礼等で使用はしているが、その使用には個人差があり、ICT機器の効果的な活用にはいたっていない。
評価の観点	(成果指標) アプリケーション指標項目10個のうち、いくつ授業で活用できるようになったか。
実現状況の達成度判断基準	教職員アンケート(29)「アプリケーション指標の中で、授業でいくつ活用できたか」 A 6個以上の職員割合が80%以上 B 6個以上の職員割合が60%以上 C 6個以上の職員割合が40%以上 D 6個以上の職員割合が20%未満
判定基準(備考)	Dの場合は、方法・内容について再検討する。
中間集計結果(%)	B(70%)
分析(成果と課題)	多くの先生がクロムブックを持って、授業へ向かっている。授業以外でもフォームやスプレッドシートなどのアプリケーションを使う場面が増えてきており、アプリの使用方法を理解している先生は多い。しかし、授業での活用となると、生徒の状況等の理由からあえて避けている先生もみられる。
今後の改善策	授業での活用法の共有、新たなアプリケーションの情報共有、生徒のクロムブックの使い方および、ネットリテラシー的指導を全教員が意識を統一して行っていく
最終集計結果(%)	A(100%)
中間結果との差(%)	+30%
分析(成果と課題)	授業で6つ以上のアプリケーションを活用できたと回答した教員が100%に達した。これは校務において日常的に使用していることや生徒が主体的に学ぶ授業(学習方法の選択や、自分で進度を調整するなど)づくりに取り組んだことが要因と考えられる。生徒のコンピューター活用能力が向上している反面、安全性や危険性の理解が低いまま使用している現状がある。
次年度への改善策	委員会活動等を通じて正しいコンピューターの活用について考える機会を生徒と共につくっていく。指導について教員間で意識を統一して行う。

学校評価関係者意見〈学校運営協議会委員からの意見〉

評価の項目	内容
全般	<p>今後も、学校任せになることのない、地域丸抱えの仕掛け作りを考えてほしい。</p> <p>例として…</p> <ul style="list-style-type: none"> ・トークダンスの取組（地域の大人とコミュニケーションとることができる仕掛けにより、地域をさらに身近に感じることができ、安全・安心な土壌づくりに貢献できるのではないか。） ・定期的な「校内カフェ（地域の大人が子どもに寄り添うことのできる仕掛け）」…定期的に行うことにより生徒の集中来室が解消され、生徒は本音で話せることができるようになるのではないか。 ・教育課程のなかでのキャリア形成支援の取組。（たとえば、業態を限定して行うことにより、じっくり、ある程度深く向き合う姿勢を保證できるのではないか）